

沖縄首里城における陸軍施設について

－ 戦中の歴史的建造物に対する改造と戦後の史跡の保存 －



AK14075 谷口 理沙

Keywords

沖縄 首里城 旧日本陸軍施設
戦争遺跡 地下壕 保存維持

1. はじめに

昨今様々な歴史的建造物の保存維持について議論がなされその詳細が語られるなか、旧日本陸軍にまつわるものは禁句として扱われ十分な調査が行われてこなかった。また同時に多くの城郭をはじめとする旧日本陸軍が使用した史跡は近年その前の江戸時代の姿として復元されつつあり、結果として明治から昭和期の姿が十分に調査されず闇に葬られている現状がある。

そういった全国の城郭・城下町を対象に都市や建造物の遷移を研究した佐藤善幸氏の論文『城下町における陸軍施設計画の史的機能について』では国内の数多くの城下町をもつ城郭の陸軍施設の姿が記録され、またその多くが既に跡形もなく姿を消していることが確認された。さらに現存しているものもその多くが傷み、対策を行わなければ近い将来一切の跡を残さず消されてしまうだろう、とも推測されている。

建築が戦争下においてどういった扱われ方をするのか、そしてどういった意味を持っていたのか、今一度十分な調査・研究がなされるべき分野であると考えられる。

2. 研究背景

2.1 研究背景・目的

本研究では、全国の旧城下町で城郭自体を利用した陸軍施設全25都市のうち22都市について比較・研究した佐藤善幸氏の論文『城下町における陸軍施設計画の史的機能について』に於いて「文化的背景が大きく異なるため」という理由で調査・比較対象から除外された沖縄首里城に焦点をあて、文化的背景も含め太平洋戦争の中で首里城がどういった役割をになったのか、またその史跡の現状とこれからの維持保存について考える。

2.2 研究方法

- 1) 琉球王国の歴史や文化を含めた都市・城郭の形成に関する史資料などを収集する。
- 2) 既往研究について整理し、陸軍施設に関する調査や沖縄の戦争遺跡について明らかにする。
- 3) 明治初期から終戦までの地図を収集し比較することで都市形状の推移や城郭への改造を分析する。
- 4) 沖縄にて現状の調査を行う。

3. 先行研究に於ける陸軍施設展開の分類について

佐藤氏の先行研究では陸軍施設の展開形態とそれに伴う都市の変容を、明治初期の読み替え、戦後の読み替え、城郭の変遷、陸軍遺構の現状、陸軍施設の史的役割の5つの観点から分析し、次に示す4つの型に分類した。

- ・郭内型：近世の城郭の枠組みを踏襲しており城下への拡散が見られないもの。鎮台制の時代は基本的にこれであり、また元来の城郭規模が大きいものに多くみられる。戦後は公園になり陸軍施設は抹消されているものが多い。大阪、小倉、山形など。
- ・錬兵場郭外型：錬兵場などが城郭外に作られているもの。近代兵器を使用することを目的としており、事例が最も多い。面積が広大な城外の錬兵場は戦后市街地に活用されるなど多様な読み替えが行われた。名古屋、秋田、新発田など。



図1 郭内型(大阪)



図2 錬兵場郭外型(新発田)

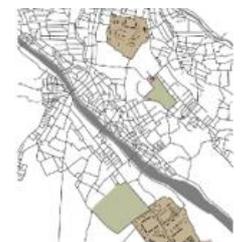


図3 郭外分置型(金沢)

- ・郭外拠点型：城郭内部と市域外部に点在し、郭外の広域に施設が散らばっているもので、城郭自体はほとんど利用されていない。郭外拠点は大学のキャンパスとされた例が多い。弘前、宇都宮、豊橋など。



図4 郭外拠点型(弘前)

4. 琉球王国について

琉球王国は1429年に現在の沖縄県の地に発祥し、1879年までの約450年間存在した王国である。

王国としての成立は15世紀だが7世紀ごろには琉球の存在は確認されており、その後多くの権力争いを経て統一を迎えている。この権力争いの中で多くの城（グスク）が拠点として築かれ、その強固な幾重もの石垣による城壁や宗教的側面をもつ広場や庭園を持つのが特徴である。1609年の薩摩藩による侵攻後は徳川幕府の従属国でありながら明朝の支配下となり、服装や朱塗りなど明の文化がここで流入している。

1879年に明治政府が軍隊を送り込み国王が追放されたことで琉球王国は完全に滅ぶこととなり、以後は琉球藩、沖縄県として日本の西端を担うことになった。1945年の太平洋戦争終戦直前には日本国内で唯一の地上戦が行われ甚大な被害と膨大な死者数を記録、1972年の返還までアメリカによる占領が行われた。

その他琉球王国・沖縄県についての歴史を首里城の変遷を中心とした概略で以下の表1に記す。

表 1 琉球・沖縄の歴史

西暦	出来事
1429	尚巴志が三山を統一、琉球王国が成立。
1453	志魯・布里の乱が起こり首里城全焼。
1609	島津藩による侵攻。
1660	首里城焼失。
1672	首里城再建。
1709	首里城焼失。
1712	首里城再建。
1768	正殿の大修理。
1872	琉球藩設置。
1879	首里城を明け渡し、琉球王国が崩壊する。同時に沖縄県が誕生。明治政府による統治が始まる。
1925	首里城正殿が沖縄神社の拝殿として国宝に指定される。
1928	首里城正殿の昭和の大改修が始まる。
1945	沖縄戦により首里城焼失。終戦後沖縄県はアメリカの占領下におかれる。
1972	沖縄県の日本本土復帰。
1957~1989	各建造物の復元工事が進められる。
2000	首里城跡などが世界遺産へ登録される。

5. 沖縄の文化・都市の特徴について

1879年の琉球王国崩壊まで現沖縄県は日本ではない異国として独自の文化を築いた。この文化は東アジアと密接な関係を保っていたことや、のちに中国・日本から強く影響を受けることなどによってその姿を明確にしていた。

5.1 宗教

起源まで遡れば他の地域と同じように生殖器崇拜、自然物崇拜、祖先崇拜の3つを基とし、琉球王国ではこれ

をルーツとする3柱の最高神が祀られていた。聞得大君御殿とよばれる神殿が首里の北にあったがこれは現存しない。後述するが首里城内にも王家の祭祀場があり、これは世誇殿と呼ばれていた。

神社に関しては尚金福王の時代に天照皇大神宮を勧請したのがはじまりといわれ、続いて波上宮をはじめとする8社が建立された。現在波上宮は再建されているため該当しないが鳥居がないのが特徴である。1942年時点では神社への崇拜はほぼ無に等しく、ほとんどの神社が荒廃していた。

5.2 城（グスク）

琉球王国が成立する前である12世紀前後、沖縄本島では各地で按司と呼ばれる首長率いる政治集団が組織され、彼らが対立する中で城塞として築かれたのが城（グスク）である。特徴は段差の多い地形を活用した計画的な築城と幾重にもめぐらされた曲線の城壁であり、特に琉球石灰で造られた城壁の堅固さは他に類をみない。

首里城を除くすべての城の建造物が按司による抗争のさなかに焼失しているうえ記録なども残っていないため現在当時の姿を知ることは困難である。城壁や地形などは保存され、他史跡と併せて琉球王国のグスク及び関連遺産群として世界遺産に登録されている。

5.3 首里城

首里城は現在の首里市中央やや南に偏在するうち最も高い丘の上に西向きで建造されている。規模は随時拡張されているが伊東忠太氏の『琉球-建築文化-』によれば1942年時点では東西に約225間、南北に150間、面積は約1万94坪であった。建築された場所や時期からすると山城であるが、首里城は琉球統一以後に発達したものであるため闘争拠点ではないという点が特異である。

首里城は琉球の城の中で最大の規模を誇り、尚巴志による統一後長きに渡って国王の居城のほか施政空間、外交・貿易空間、祭祀空間としての役割をになっていた。二重半の城壁に10を超える門を越えた先にある正殿は朱塗りに大きな唐破風をもつ2階建て、その正面に広がる御庭が特徴的である。

1942年に沖縄神社の拝殿として国宝登録されたのち太平洋戦争で甚大な被害をうけ、戦後は近世の姿で復元されている。現在は他の城などと共に世界遺産に登録されており、南殿の一部や正殿奥などは現在も復元工事が続いている。

5.4 首里城下町

丘の上に城が建ち、城下町の街路は地形に沿って造られているため直線道路は見られず街区自体も不整形である。この整備は15~16世紀にかけて行われたとみられ、歪ではあるものの首里城を中心に中央集権化が図られている。また特徴的なのは位階による居住地の線引きが明確に行なわれていない点である。これは位階自体が不安

定だったことや居住地の移転が多かったことに由来するという指摘がある。

住居について、首里では一般的に石垣で囲われた敷地の中に赤瓦屋根の平屋が建っている様相であり、他集落では藁葺屋根であった。琉球は外交や貿易で繁栄していたが、そもそも島国であったことや王国側が物流を管理していた関係から市場の発展は芳しくなく、この建築様式は沖縄戦によって焦土と化すまで継続されていた。

現在も直線道路は少なく街中の上下が激しいなど城下町の区画に大きな違いは見られない。

6. 陸軍施設の展開形態とそれに伴う都市の変容

1944年沖縄県には第32軍師団司令部が置かれ、その目的は敵連合軍の上陸に対する守備、そして陸続きとなる九州以北への侵攻をなるべく遅らせることであったとされている。師団司令部の本部は首里城におかれ、周囲の城も含め戦いに備えた改変がなされた。

6.1 明治初期の読み替え



図5、6 1890年頃熊本鎮台分遣隊配置図、1919年首里城

1878年の琉球処分後首里城は明治政府に明け渡され、熊本鎮台沖縄分遣隊の駐屯地として使用された。図5は当時の平面図であり、兵舎としての利用の様子がうかがえる。この際正殿の柱が取り除かれるなど建物に対する軍隊による改変が行われ、破損などしても特に修理を行わなかったため損傷箇所はそのままにされていた。熊本鎮台は治安維持軍として駐屯していたため各所に同軍警の分署が配置されたが、当時沖縄で始まった徴兵制は九州の所属となるものであり訓練などは九州で行われていた。したがって城外に練兵場などは建設されず、城郭内の建造物のみが鎮台の宿舎や活動拠点などとして読み替えられたと考えられる。

1896年の熊本鎮台撤退以降、学校を始めとする公共施設として利用されはじめ、北殿は公会堂として、南殿番所や二階御殿などは校舎として建造物はそのままだで使用された。尋常高等小学校もそのひとつであり建造物を利用していたが、生徒数の増加から1911年下之御庭（シチャウナー）部分に新築という形で増築された（図6）。

公共施設としての利用中も特に修復等は行われず建造物は荒廃、崩壊の危険性から1923年首里市によって正殿の解体、その敷地に新たに沖縄神社の造営が決議された。沖縄県民は保存を訴えたが沖縄県の財政事情から保存は難しいと思われた。しかしその噂を聞きつけた鎌倉芳太

郎や伊東忠太の保存の訴えによりそれを免れ、首里城正殿を沖縄神社に寄付し、その拝殿として国宝指定されたことで国によって修理が行われた。1939年の太平洋戦争前の姿は1931年の修復のために描かれた坂谷図（図7）

に記されたものが最後であり、この図中で赤色のものが当時残っていた建造物、黄色のもの・点線が焼失前の建造物の配置とみられる。



図7 坂谷図

一方で太平洋戦争中の陸軍による建造物への改変についてはほぼ行われなかったと考えられる。これについて

明確な記録は残っていないが、司令部が首里城に配されたのが1944年と他城郭のように戦争に備えて前々から周到に準備されたものではないことや陸軍の日記や電報などにおいて明記された陣地作成に関する指示が飛行場と壕構築のみであることから推測が可能である。また、建造物への改変ではないが首里城地下を横断するように1~2kmにわたって壕が掘られ、この内部には無数の部屋が作られていた。奥には作戦室や軍司令官室もあり、当時は軍兵が自由に寝泊りできたため約1000人も人間がこの狭く暗い空間の中で生活していた。

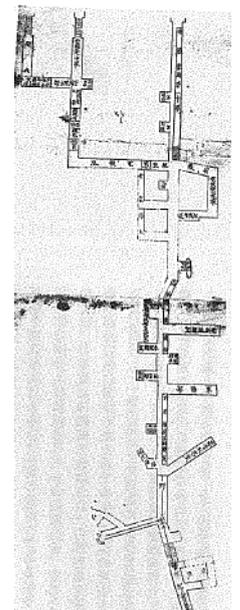


図8 32軍司令部壕配置図

6.2 戦後の読み替え

首里城は本土決戦によって灰燼に帰し、城下町含め面影の一切が失われた。したがって建造物がそのまま読み替えされたケースはなく、跡地利用という形では最初に琉球大学校舎が建てられた。

戦後沖縄県がアメリカの占領下におかれていたこともあり沖縄県民の中に首里城復元の機運が高まってもその実現はなかなか進まず、教育機関・居住地・農村地が優先的に作られていった。しかし強い県民の声のもと本土復帰前である1957年から守礼門・円覚寺総門・園比屋武御嶽石門の復元が始まり、1982年の琉球大学移転を契機に国営公園整備が始まった。現在では首里城公園として国内でも有数の観光地となっている。

また首里城の地下壕は戦後潰されたり読み替えが行われることなく現在も首里城公園の中にその入り口を呈している。これについては戦後戦争遺跡として観光目的で保存活用が検討され、1962年より那覇市が調査を開始した。しかし内部崩壊が激しいことから開発を断念、1968年には豊見城の海軍司令部壕を公開した沖縄観光開発事

業団が同目的で調査を行いまた同理由から断念している。その後1992年に壕の文化財指定要請が提出されたがこれも却下された。1995年沖縄戦終結50周年記念で沖縄県が壕の保存公開を決定、1997年にその計画が提出されたがその後一切の動きがなく事実上の凍結状態となって現在に至る。

したがって戦後の読み替えとしては他城郭と同様に学校敷地とされたのち公園とされている、もしくは読み替えが行われずそのまま宙ぶり状態となっているといえる。



図9, 10 第32軍司令部壕位置・内部の様子

6.3 城郭の変遷

最初期の城郭は他の城同様に按司の闘争拠点として築かれた山城であるが、その後国府としての役割を担うため大幅に改変が行われた。国府になって以降はたびたびの焼失とその修理は行われたが大幅な改変はなく、次の改変は前述の熊本鎮台による駐屯地利用となる。そしてその後は公共施設、軍司令部本部、学校校舎、現在の観光地となっている。

6.4 陸軍遺構の現状

陸軍遺構は壕を除いてほぼ残っていないといっても過言ではない。これは空襲・本土決戦によってその大半が焼失したことに加えて、戦後初期に住民たちの「日常生活で戦争の跡を見たくない、子孫に伝えたくない」という意志から破壊が進んだことに由来する。

首里城では前述の壕が立ち入り禁止状態で維持されているのみとなり、現地に説明のパネルはあるものの首里城公園内の地図などに記載はなく訪れる人は非常に少ない状態となっている。

6.5 陸軍施設の史的役割

他陸軍施設に於いて行われたような軍都としての都市整備は行われず、既にあった建造物に陸軍が出入りしたのみという状態であるため陸軍施設自体が担った史的役割はほぼ皆無といってもよい。一方で、首里城が陸軍施設として使用された結果周囲が激戦地となったという点では他の陸軍施設とは一切異なる影響を周囲に残したとも考えられる。

7. 総括

以上より首里城に於ける陸軍施設展開は極例外的な郭内型である。理由は以下に挙げる通りである。

- ・熊本鎮台期、32軍期のどちらに於いても司令部や錬兵場などの軍事施設が郭外へ展開していない。
- ・熊本鎮台は戦争に備えた配備ではなく治安維持が目的のため他城郭に於ける明治初期の陸軍展開とは目的が大きく異なる。

- ・32軍が展開した際首里城は沖縄神社であり、城郭でありながらも扱いとしては宗教施設であった。
- ・32軍は建造物というより地下壕を主に使用していた。

首里城に於ける陸軍展開は他城郭と比較して城郭自体の造り・歴史的背景・軍の利用の仕方などが非常に特殊だが、その現状は他の例に漏れず日の当たらないところにある。特に第32軍司令部壕は現存しているにも関わらず公開の計画は止まったまま、情報として触れられるものは那覇市のサイト内の簡素な説明、草木で覆われれば視認できない入口前の目立たない位置にひっそりと置かれた説明のパネルのみとなっている。

類似するケースとしてまず長野県松代にある大本営跡が挙げられる。これは太平洋戦争末期に本土決戦の最後の拠点として大本営と政府各省等を東京から内地に移そうと長野県松代町に位置する3山に渡って掘られた非常に大きな地下壕であり、平成元年から戦争遺跡としての周知を目的として一部が公開されている。また大本営の防空用施設として皇居吹上御苑内に建設された御文庫付属庫は戦後一切の手が加えられることなく放置されていたが、2015年に戦後70年を機に公開を決定、宮内庁HPにて内部の写真・ビデオ映像が公開されている。補修などは行わない方針だが、今後定期的に立ち入って記録を残すとのことである。さらに比較的規模の小さな例として館山市内では2003年に市内の地下壕について大規模な調査が行われ公開に向けて安全面などから具体策が考案されている。

首里城に於ける地下壕は城郭自体を使用したものでそないものの唯一の地上戦が行われた地の戦争遺跡として非常に貴重なものであり、戦争が生んだ建造物としてその歴史と共に多くの人に周知されるべきであると言える。経年劣化や内部の劣悪な環境による内部崩壊が激しい現状から内部の一般公開は非現実的かもしれないが、御文庫付属庫のような内部公開などを行うことで歴史上から消えないように今後も考え続ける必要がある。

参考文献

- 1) 城下町における陸軍施設計画の史的機能について：佐藤善幸，芝浦工業大学修士論文 2004年3月
- 2) 琉球王国の歴史：佐久田繁，月刊沖縄社 2004年3月
- 3) 沖縄の戦争遺跡保存をめぐる現状と課題：吉浜忍，沖縄県史研究紀要第4号 1998年3月
- 4) 沖縄県における戦争遺跡の保存活用：吉浜忍，沖縄国際大学社会文化研究Vol.11 2008年6月
- 5) 沖縄戦研究と軍事資料：吉浜忍，史料編集室紀要第24号 1999年3月
- 6) 首里城公園公式HP：<http://oki-park.jp/shurijo/>
- 7) NHK沖縄戦70年：<https://www.nhk.or.jp/okinawa/okinawasen70/>